

# 韓国中等教育機関への留学生ボランティア派遣 プログラム実践報告

—国際交流基金ソウル日本文化センターにおける  
日本語ネイティブ・ゲスト派遣の試み—

長田佳奈子・中沢徳子・北村武士・十河俊輔

## 〔要 旨〕

本稿では2007、2008年に実施した国際交流基金ソウル日本文化センターにおける韓国中等教育機関への日本語ネイティブ留学生派遣プログラム（約50校へ延べ64人の留学生を派遣。約8000人の生徒が日本語の授業で留学生に接した）の運営方法および成果について報告する。留学生がゲストで入ったことにより授業が活性化され、生徒の学習動機や日本への関心が高まるなどの効果が見られた。生徒および留学生のアンケートからは概ね肯定的な評価が得られた。また、教師の授業報告から、留学生の協力・参加による授業を考え実施することで教師がコミュニケーション重視の授業について再考し、ふだんの授業を見直すきっかけになったことが窺える。また、教師ではない留学生にどのように協力・参加してもらうかなど、プログラム実施中に現れた課題とその対応策にも触れる。このプログラムは参加者から好評を得たが、海外におけるネイティブ参加授業の一形態として紹介したい。

## 1. はじめに

留学生ボランティア派遣プログラムは国際交流基金本部の2006年度の先駆的・創造的事業として採用され<sup>①</sup>、2007年度、2008年度の2年間4学期にわたり実施されたものである。概要および目的を以下に示す。

- ①韓国の大学、大学院に通う日本語ネイティブ<sup>②</sup>留学生（以下、留学生）をボランティアとして韓国中等教育機関に派遣し、日本語の授業に入ってもらい、生徒に「日本語体験」をする機会を与える。
- ②留学生が韓国の教育現場を体験し、若者に接することで韓国への理解を深める。
- ③中等教育機関の韓国語教師（以下、教師）が、留学生をゲストとして受け入れた授業を計画、実施することで、新しい授業スタイルを体験し、「会話能力の向上」「日本文化への関心と理解を深める」「日本人とのコミュニケーションに能動的に参加する態度の養成」等、第7次教育課程<sup>③</sup>の目標に近づくための効果的な授業を再検討する。本プログラムは、「留学生をゲストとして受け入れた授業」を試みようとする教師が個人と

して応募する研修プログラムである。また、広く日本語ネイティブを対象にするのではなく、留学生を対象としたのは、留学生は中高生と比較的年齢に近い者が多く、一定の韓国語力があり、韓国事情に通じているためである。留学生を活用することで、より効果的かつ経費負担が少なく事業ができると考えた。本稿では、海外の日本語教育機関で日本語ネイティブボランティアを導入する際の参考になることを考えて、2年間のソウル日本文化センター（以下、ソウルセンター）の実践及び問題点とその対応策を報告する。

## 2. 背景

国際交流基金2006年海外日本語教育機関調査によると、海外の日本語学習者約298万人のうち、韓国は約91万人、そのうちの約77万人が初・中等教育の学習者である。ソウルセンターでは波及効果を考え、中等教育機関の日本語教師の支援を積極的に行っている。

韓国の中学生、高校生はマスメディア、インターネットを通して日本の情報に接することは多いが、実際に日本へ行ったり、直接日本語ネイティブと話す機会は多くない。一方、韓国国内に滞在する日本語ネイティブは相当数いる。ソウルジャパンクラブ事務局に所属会員数を問い合わせたところ、2009年7月現在、法人会員は約350、個人会員は約1700とのことである。また、日本学生支援機構の「協定等に基づく日本人学生の海外派遣状況（平成19年度版）」によると、教育又は研究等を目的として平成19年度中（平成19年4月1日から平成20年3月31日まで）に韓国に派遣された日本人学生は1399人である。なお、これらのデータの数値のほとんどは日本国籍保持者である。

澤邊・金（2005）は中等教育機関の日本語授業への日本語ネイティブ参加の形態として、(1)教師、(2)ゲスト、(3)インターネットを通じた交流の相手、の3つを挙げている。(1)教師については、外国語高校や一部の高校で日本語ネイティブ補助教師を採用しているものの、ソウルセンターが把握している限りでは、その数は全国で50名程度である。特技適性（希望者が参加する放課後の学習時間で、有料の場合もある）の時間に教えている非常勤日本語ネイティブ教師の例も見られるが、それも多くはない。(2)ゲストに関しては、澤邊・金（2005）によると主に若手教師が個人的に日本語ネイティブを授業に招いて教室活動を行っているとのことである。

このように、韓国内に日本語ネイティブが多数いるものの、中等教育機関の日本語授業に関わる機会があまりない状況下において、ソウルセンターから留学生ボランティアを派遣することが、韓国の中等日本語教育支援の一端になると考えた。

### 3. 内 容

#### 3.1 本プログラムの経過

表1に本プログラムの経過を示す。

表1. 留学生ボランティア派遣プログラム経過

年	月	
2006	10	国際交流基金本部の先駆的・創造的事業として本事業が採用される。
2007	1	中等教育機関の教師に留学生派遣希望を聞くアンケート実施
	2	事業計画、教師および留学生募集基準検討開始
	3	・参加希望教師へメール案内（24校） ・留学生募集（定員20名） ・教師決定（17名）
	4	・参加教師から留学生派遣日時希望受付開始 ・留学生決定（24名）→留学生説明会 ・教師と留学生の日程調整開始
	5	留学生派遣開始 5月留学生派遣実績：10回
	6	6月留学生派遣実績：11回
	7	・7月留学生派遣実績：2回 ・留学生にボランティア証明書・交通費支給 ・後期事業計画、募集基準等検討開始
	8	・留学生募集（定員20名） ・教師募集（定員25名）、前期参加教師へ参加案内送付
	9	・留学生決定（20名）→留学生説明会 ・教師決定（16名）
	10	・教師事前講習会 ・教師と留学生の日程調整開始 ・10月留学生派遣実績：3回
	11	・11月留学生派遣実績：17回 ・教師研修で事業の案内、参加教師中途募集（教師1名決定）
	12	・12月留学生派遣実績：10回 ・留学生にボランティア証明書・交通費支給 ・留生意見聴取会
2008	1	教師授業情報交換会
	2	・2008年度前期事業計画、募集基準等検討開始 ・ソウル市教育庁に職務研修認定申請
	3	・留学生募集（定員20名） ・教師募集広報（定員25名）

4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・留学生募集締切、決定 (18名)</li> <li>・教師募集、決定 (16名)</li> <li>・4月19日 留学生説明会、教師事前講習会</li> <li>・教師と留学生の日程調整開始</li> <li>・ソウル市教育庁職務研修認定</li> </ul>
5	5月留学生派遣実績：13回
6	6月留学生派遣実績：15回
7	<ul style="list-style-type: none"> <li>・7月留学生派遣実績：13回</li> <li>・留学生にボランティア証明書・交通費支給</li> <li>・日本語教育国際研究大会(於釜山外国語大学)にて本プログラム実践報告</li> <li>・教師授業情報交換会</li> <li>・2008年度後期事業計画、募集基準等決定</li> <li>・留学生継続参加受付(応募10名)、教師継続参加受付(応募5名)</li> </ul>
8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・留学生新規募集(新規定員10名)</li> <li>・教師新規募集(定員25名)</li> </ul>
9	<ul style="list-style-type: none"> <li>・留学生決定(16名)</li> <li>・教師決定(9名)</li> <li>・9月20日 留学生説明会、教師事前講習会</li> <li>・教師と留学生の日程調整開始</li> </ul>
10	10月留学生派遣実績：1回
11	11月留学生派遣実績：12回
12	<ul style="list-style-type: none"> <li>・12月留学生派遣実績：8回 留学生派遣終了</li> <li>・留学生にボランティア証明書・交通費支給</li> <li>・韓国日本語教育学会第14回教員研修会にて本プログラム実践報告</li> <li>・教師授業情報交換会</li> </ul>

### 3.2 ソウルセンター担当者の業務

ソウルセンターの日本語・日本研究部が本プログラムを担当し、コーディネーターと日本語教育アドバイザーが主に業務に当たった。コーディネーターの業務は運営・連絡全般、留学生・教師の募集および決定、日程管理・調整、授業見学、アンケート実施などである。また、日本語教育アドバイザーは留学生説明会、教師事前講習会、教師授業情報交換会の内容策定、授業計画案の確認および相談、教師授業報告書の確認などを担当した。

### 3.3 教師の募集および教師の実践内容

2007年前期は留学生派遣に関するアンケートに回答した中等学校76校中、留学生派遣を希望し、かつソウル近郊の学校に参加可否を確認したところ、16校が参加を希望した。その後辞退した学校が4校あり、2007年前期参加校は12校となった。アンケートで参加希望を募ったのは2007年前期のみで、2007年後期以降は教師個人単位の公募制とした。2008年はソウル市教育庁に「15時間、1学点の職務研修」(詳細は3.3.4で述べる)として申請し、認定された。職務研

修を希望する教師には教師事前講習会と教師授業情報交換会への参加、報告書の提出を義務付けた。

### 3.3.1 教師募集要件

教師に募集要件として提示した留学生派遣のための条件と注意事項を以下に示す。

#### ■留学生派遣条件

- ①申請者はソウル駅から公共交通機関を利用し1時間半以内にある中学校・高校の現役日本語教師である。
- ②センターが開催する教師事前講習会に参加できる。(2007年後期以降)
- ③派遣期間内に勤務する学校で1日あるいは2日留学生をゲストに迎えて授業ができる。  
1日の授業数は2時間までとする。
- ④留学生の派遣について学校長の承諾が得られる。
- ⑤授業計画案を日本語で作成し、派遣日の2週間前までに提出できる。

#### ■注意事項

- ①留学生は決定した授業以外に参加できない。留学生は無償ボランティアである。韓国の法律上の制限があるため、留学生に金銭の譲渡は行わないこと。留学生の個人情報をも他の目的で使用したり、生徒及びその他第三者に情報提供したりしないこと。  
(※②、③は2007年後期以降提示)
- ②留学生は韓国の法律上、教師として教壇に立つことができない。よって、補助教師ではなく、ゲストとして派遣する。授業の内容・計画・準備・進行は、教師がすべて行い、留学生は教師の指示にしたがい活動する。留学生はボランティアであり、過剰な負担をかけぬよう配慮すること。また、留学生は教師ではないので、授業の相談はしないこと。
- ③本プログラムでは「生徒とゲストが直接話す」ことを重視した授業を想定している。「留学生が韓国語で日本文化について説明する」授業や、「留学生が話したことを教師が通訳して生徒に伝える」活動、「日本料理の調理実習」や「着物の着付け」などの文化体験授業は、本プログラムの対象ではない。

### 3.3.2 教師への広報(2007年後期以降)

2007年後期以降、本プログラム参加教師を公募した。広報は以下のような方法で行った。また、応募教師数を表2に示す。

- ①前学期参加教師およびソウルセンター教師研修に参加したことのある教師にメールで案内を送付した。
- ②ソウル日本語教育研究会、京畿道日本語教育研究会およびJTA (Japanese Teachers Association)<sup>(4)</sup>の代表に広報を依頼した。
- ③ソウルセンターのホームページ、JTAのホームページに参加教師募集案内を掲載した。

- ④日本語教育アドバイザーが外部の中等教育教師研究会などに出講した際、本プログラムについて紹介したり、案内ちらしを配布するなどした。

申込み方法はソウルセンターのホームページより応募用紙をダウンロードし、メールで応募用紙を送付する方式を取り、決定者に参加通知を送付した。

表2. 応募教師数

	募集方法	新規応募者	継続参加希望者	合計	定員
2007前期	アンケート回答者から選抜	17	—	17	25名
2007後期	公募	15	1	16	
2008前期		10	6	16	
2008後期		4	5	9	

### 3.3.3 教師の実践内容

本プログラムに参加決定した教師は以下のことを行った。

- ①教師事前講習会に参加する。(2007年後期以降、新規参加者は必須。また、2008年前期以降、職務研修受講者は必須。)
- ②留学生派遣日時希望表を派遣希望3週間前までにソウルセンターに送付する。
- ③留学生のプロフィールを受け取ったら、留学生に電話し、日程を確認する。
- ④授業計画案を授業の2週間前までにソウルセンターに提出する。
- ⑤授業当日、授業開始30分前から留学生と打ち合わせをする。
- ⑥全授業終了後、授業報告書をソウルセンターに提出する。
- ⑦教師授業情報交換会に参加する。(2007年後期以降、参加は任意。ただし2008年前期以降、職務研修受講者は必須。)

なお、教師事前講習会および教師授業情報交換会の内容は以下のとおりである。

■教師事前講習会：①参加教師が自己紹介をした。

- ②ソウルセンターが本プログラムの趣旨を説明し、前学期の本プログラム実績およびアンケート結果を報告した。
- ③2007年前期の留学生がゲスト参加している授業のビデオを視聴した。
- ④ソウルセンターがボランティア派遣の流れおよび事務手続き・注意点、授業に関する注意点、授業計画案の書き方、報告書作成などを説明した。

■教師授業情報交換会：①ソウルセンターが本プログラム実績を報告した。

- ②教師が授業実施報告をし、質疑に応答した。
- ③「生徒と日本語ネイティブがたくさん話せる教室活動」「自分の授

業を外部に紹介、発表する方法」「自分で日本語ネイティブを募集する方法」などについて意見交換した。

### 3.3.4 ソウル市教育庁職務研修<sup>⑤</sup>内容（2008年前期以降）

2007年後期から教師事前講習会、教師授業情報交換会への出席や授業報告書の提出を教師にお願いしたが、それらのすべてをこなそうとすると、一定程度の時間を要し、教師にとって負担となったようである。そこで、教師の「計画→実践→検証」の過程を教師研修として捉え、15時間分の教師研修としての学点をつけることで、より教師にメリットのあるプログラムになるのではないかと考え、ソウル市教育庁に申請したところ職務研修として認定された。15時間の研修の時間配分は教師事前講習会出席（4時間）、授業計画案および授業報告書の作成、提出（7時間）、教師授業情報交換会出席（4時間）である。授業準備、授業実施は研修時間に含まなかった。

## 3.4 留学生募集・説明会および留学生の活動内容

留学生を募集するにあたり、ソウル市内および近郊に住む日本語ネイティブの大学生、大学院生を対象にした募集要件を作成し、広報した。なお、留学生ビザ所持者はたとえ無償でも日本語教師として教壇に立つことは韓国の現行法上許されないため、本プログラムはあくまでも日本語ネイティブ・ゲストの派遣、ボランティアとしての派遣を考えた。

### 3.4.1 留学生募集要件

留学生を募集するにあたり、以下の全てを満たすことを要件とした。

- ①日本語が母語である。
- ②韓国内の大学・大学院に通っている。
- ③ソウル特別市およびソウル特別市近郊の中学校・高校へ訪問が可能である。
- ④ソウルセンターが行う留学生説明会に参加できる。
- ⑤日本語教育に携わったことがある、あるいは関心がある。
- ⑥韓国語での基本会話ができる。一人で公共交通機関を利用し、訪問校へ行ける。
- ⑦責任を持ってボランティア活動が行える。
- ⑧どんな人とも良好な人間関係が築ける。

### 3.4.2 留学生への広報

留学生への広報はコーディネーターがソウル市内の大学への直接訪問、インターネット、メールなどで行った。

#### ■広報先

- ①ソウル市内の主要大学14校に掲示等を依頼した。
- ②インターネット：ソウルセンターのホームページ、ソウルジャパンプラブの掲示板に募集

案内を掲載した。

③ソウル市内の日韓文化交流センター（1ヶ所）へポスター掲示を依頼した。

④前学期ボランティア活動者に募集案内のメールを送付した。（2007年後期以降）

申込み方法はソウルセンターのホームページより応募用紙をダウンロードし、メールで応募用紙を送付する方式である。応募数が多い場合は、ソウルセンターが留学生を選定し、決定者に参加通知を送付した。表3に応募留学生、実際の参加者数を示す。

表3. 応募留学生数（※（ ）内は女性）

	新規応募者	継続参加希望者	応募者合計	参加者
2007前期	24 (16)	—	24 (16)	18名 (14)
2007後期	13 (10)	13 (10)	26 (20)	19名 (16)
2008前期	12 (10)	6 (4)	18 (14)	16名 (13)
2008後期	6 (4)	10 (7)	16 (11)	11名 (8)

### 3.4.3 留学生説明会

留学生に活動内容を理解してもらうため、説明会を行った。新規応募者は説明会に必ず参加してもらうこととし、継続応募者の参加は任意とした。説明会の内容を以下に示す。

■内容 ①留学生が自己紹介をした。

②ソウルセンターから留学生の活動に関する事務連絡を行った。また、韓国における日本語教育の現状および本プログラムの趣旨、活動にあたっての注意点を説明した。

③留学生が2007年前期の留学生がゲスト参加している授業ビデオを視聴した。（2007年前期のみ韓国人と日本人のティーム・ティーチングの授業ビデオを視聴した。）

④日本語教育アドバイザーの指示のもと、留学生が日本語授業の教師役と生徒役を体験した。発話モデルをしたり、日本語ゲームを体験したりした。

また、中等教育機関に赴き、日本語の授業に参加するにあたり、以下のようなことを説明した。

■留学生への説明内容・注意点など

①留学生はあくまでゲストであり、日本語教師の役割は担わないというのが前提である。教師が立てた授業計画案に基づいて、教師の指示のもと活動する。

②教師はいつも一人で授業をしており、ゲストを呼んだ授業に関しては試行錯誤の段階であるため、教師の新たな挑戦に協力してほしい。

③授業計画案に書かれている教室活動について、教師に意見を言わないようにしてほしい。気になる点はソウルセンターに相談し、授業後も授業の批判をしないようにしてほしい。

④授業中に教師の日本語の誤用訂正をしないなど教壇に立つ教師の立場に配慮してほしい。

- ⑤生徒からの自由質問コーナーなどで答えにくい質問があった場合、「わかりません」「他の人はわかりませんが、私は……」など、うまく交わすようにしてほしい。
- ⑥声は大きく。できるだけ方言を出さないように気をつける。
- ⑦遅刻厳禁。服装は、Tシャツにジーンズなど、カジュアルすぎる格好は避ける。

#### 3.4.4 留学生の活動内容

留学生の活動内容を以下に示す。

- ①コーディネーターが日程を調整し、活動日決定後、留学生に個別連絡する。
- ②ソウルセンターから訪問校のデータをメールで受け取り、訪問校への行き方を確認する。
- ③訪問校の教師から確認の電話を受けたら、電話があったことをコーディネーターにメールで報告する。
- ④活動日の1週間前、コーディネーターから「授業計画案」をメールで受け取り、内容を確認する。質問がある場合は、ソウルセンターに連絡する。
- ⑤活動日当日は、授業開始30分前までに訪問校へ行き、教師と打ち合わせをする。
- ⑥授業に参加する。
- ⑦授業終了後、コーディネーターに電話をし、活動終了の報告をする。
- ⑧メールでソウルセンターにアンケートを送る。
- ⑨各学期の活動期間終了後、ソウルセンターでボランティア証明書と交通費を受け取る。

## 4. 成果と課題

### 4.1. 生徒の反応

コーディネーターが授業見学をした際の実感、撮影したビデオの様子や教師と留学生のコメントなどから、生徒が楽しんで授業に参加した様子が窺えた。教師に「うまくいった点」を聞いたところ、生徒の反応がよかったというコメントが多かった。具体的には、

- ①生徒の興味、関心を引いた。学習の動機付けになった。生徒の学習意欲が向上した。
- ②日本語ネイティブと話す体験ができ、生徒の満足度が高かった。
- ③授業が活性化され、雰囲気がよかった。

などが挙げられた。また、「生徒が日本に対して高い関心を持っていることが分かった」「生徒は習っていない表現でも自分たちなりに理解しようとしていた」など、教師側にも新たな発見があったようだ。

2007年後期以降、任意で教師に生徒へのアンケートをお願いした。各教師がアンケートを集計し、報告書の中でまとめてくれた。表4はさらにそれを集計したものである。約9割の生徒が、「楽しかった」「まあまあ楽しかった」と回答しており満足度は高かったと思われる。一方、「あまり」「楽しくなかった」と回答した生徒が約1割いた。

表4. 生徒アンケート結果

	楽しかった	まあまあ 楽しかった	あまり 楽しなかった	楽しなかった	合計	アンケート実施 教師数
2007年後期	383 (54.2%)	197 (27.9%)	102 (14.5%)	24 (3.4%)	706	7
2008年前期	1670 (67.4%)	609 (24.6%)	142 (5.7%)	58 (2.3%)	2479	15
2008年後期	767 (57.3%)	404 (30.2%)	120 (9.0%)	48 (3.6%)	1339	7
合計	2718 (62.1%)	1177 (26.9%)	359 (8.2%)	124 (2.8%)	4378	28

生徒に「楽しかった理由」「楽しなかった理由」を自由記述で書いてもらったところ、それぞれに示唆に富むコメントが見られた。

#### ■楽しかった理由〔生徒〕

- ・授業方法が新しく、いつもと違った。生徒が積極的に参加し、雰囲気がよかった。授業に集中でき、楽しかった。
- ・日本語ネイティブと出会い、交流できた。日本語ネイティブと話せた。日本語が聞けた。
- ・日本や日本文化への親しみがわいた。異文化理解、自国文化の理解につながった。
- ・留学生の態度が積極的であった。

#### ■楽しなかった理由〔生徒〕

- ・留学生が来る回数が少なかった。時間が短かった。
- ・教師の授業の進め方がいつもと変わらなかったり、発話機会が少なかったり、自由度が低かったりして、期待との差が大きかった。
- ・自身の日本語力が不足しているため、日本語が聞き取れないし、わからなかった。
- ・留学生の態度が消極的であった。

## 4.2 留学生の反応

留学生は本プログラムに意欲的に、積極的に関わってくれた。アンケートには「生徒の積極的な姿勢に感動した」「生徒の熱心な姿が印象的だった」「教師主導でスムーズに授業が進み、自身ものびのびと活動することができた」「教師の授業に対する情熱や姿勢が印象的で勉強になった」など、留学生が授業を楽しんだことが伝わるコメントが多数あった。また、留学生にとって普段触れることのない、韓国中等教育の現場を体験する機会となっており、「日本の中高生との違い」「想像していたこととの違い」など留学生にも新たな発見があったようである。

一方、「生徒がざわついたときや指名された生徒が恥ずかしがって話さないときの対応の仕方」「事前に指示がなかったことを授業中教師から指示された」「教師の指示がよく理解できなかった」「歴史問題について質問された」「道に迷い、遅刻しそうになった」など、困ったこと、戸惑ったこともいろいろあったようである。しかし、皆おおらかな気持ちで臨機応変に対応してくれたおかげで、大きなトラブルになることはなかった。

留学生のアンケートを見ると、「活動内容に満足しているか」という質問に87%が「大変満足」あるいは「満足」と回答した。(表5) その理由の多くは留学生自身の充実感や達成感によるものである。具体的には、「授業の雰囲気が良かった」「生徒や教師に歓迎された」「中高生とのふれあいや韓国の教育現場体験がよかった」「授業で十分に自身の役割が果たせた」などが挙げられていた。一方、「あまり満足していない」理由としては、「緊張してしまった」「自身の役割が単純であった」「打ち合わせが十分にできず自身の役割が十分把握できなかった」などがあった。

表5. 留学生アンケート結果

	大変満足	満足	やや不満	不満	回答数	派遣回数
2007年前期	3(15.0%)	12(60.0%)	5(25.0%)	0(0.0%)	20(87.0%)	23
2007年後期	8(28.6%)	16(57.1%)	4(14.3%)	0(0.0%)	28(93.3%)	30
2008年前期	18(58.1%)	12(38.7%)	1(3.2%)	0(0.0%)	31(75.6%)	41
2008年後期	9(56.3%)	5(31.3%)	2(12.5%)	0(0.0%)	16(76.2%)	21
合計	38(40.0%)	45(47.4%)	12(12.6%)	0(0.0%)	95(82.6%)	115

#### 4.3 教師の反応

2007年前期の教師アンケートおよび2007年後期以降の授業報告書から、留学生をゲストとして呼ぶという教師にとっての新たな試みが概ね成功したことが窺える。教師から「日本語を教えている私もまた日本の留学生と共に授業ができて、大変貴重で意味のある時間だった。初めはどのように対応するべきか用心深くなり、難しかったが、留学生が気楽に授業に臨んでくれたし、授業にもがんばってくれたことに感謝したい」「生徒はもちろん教師自身も勉強になり、いい経験になった。生徒が頑張ってくれてうれしかった。日本語でもっと話したいという気持ちを持ち続けてほしい」「みんな喜んでくれて、私にとっても、生徒にとっても、みんなよい経験になった。今度の授業は準備がたりなかったが、次にもう一度機会ができれば、うまくいかなかった点をもとにして前よりよい授業にならないかと思っている」など、さまざまなコメントがあった。4.1.で触れたように、生徒の日本への関心の高さ、生徒の潜在能力など、通常の授業では気づきにくいことに教師が気づききっかけにもなったようである。しかし、生徒の

反応はよかったものの、教師としては反省すべき点があると感じていることが窺えた。以下、教師の報告書から「うまくいった点・良かった点」「うまくいかなかった点・改善すべき点」について、教師のコメント内容を記す。

■うまくいった点・良かった点

- ①楽しい雰囲気により生徒の興味、関心を引き、学習の動機付け、学習意欲の向上が見られた。
- ②日本語ネイティブと話す体験ができ、生徒の満足度が高かった。
- ③教具を活用するなど、教室活動がうまくいった。
- ④授業が活性化され、雰囲気がよかった。通常の授業より生徒の反応がよかった。
- ⑤留学生は緊張しながらも、楽しんでくれた。興味をもって熱心に臨み、生徒の反応を見ながら、教室活動の中で十分に役割を果たしてくれた。また、生徒の質問に真摯に答えてくれた。

■うまくいかなかった点・改善すべき点

- ①時間配分がうまくいかなかった。→余裕をもち、生徒のレベルに合わせて時間配分を変えたい。
- ②目標設定、授業計画（状況設定、会話例、語彙のコントロール）、教室の雰囲気作り、授業進行がうまくいかなかった。→ゲームの活用を考えたり、表現を吟味したり、語彙量を調整したい。
- ③留学生へのへの依頼・指示内容を改善する必要がある。→留学生の役割や、生徒と留学生の発話の機会を増やしたい。また、留学生をきちんとリードしたい。
- ④教師の発話量が多すぎたり、通訳をしすぎたりした。→教師がすぐ留学生の日本語を通訳しないようにしたい。
- ⑤留学生の日本語のコントロール、教具の使い方などで留学生が教師ではないために起こる問題があった。しかし、大局に影響はなかった。

#### 4.4 問題点とその対応策

本プログラムは試行錯誤の中で始まったが、特に立ち上げの2007年前期は解決を要するいくつかの問題に遭遇した。ここでは「授業計画案」と「教師のふりかえり」に関して出た問題点とその対応策について述べる。対応策を講じた結果、問題点は概ね解決された。

##### 4.4.1 授業計画案

2007年前期は教師に自由に「生徒と留学生が日本語で話す」授業を考えてもらった。その際、4つの問題点が挙がった。

###### ①留学生が見て、わかりやすいか

日本語教育アドバイザーが授業計画案の内容を確認する際、「留学生が見てわかりやすいか」を中心に見たが、留学生が何をするかきちんと書かれていない授業計画案もあった。学期途中で授業計画案の書き方の指導が必要だと気づいた。

→【対応策】授業計画書の例を送付するなどした。また、次学期から教師事前講習会を開催し、留学生が見て、わかりやすい教案について説明した。授業計画書の例を提示し、細かい注意点の説明も行った。また、前学期の授業ビデオを視聴しながら授業のイメージをつかんでもらうようにした。

### ②留学生が韓国語を使うか、教師が通訳するか、生徒の自由質問の内容をどうするか

生徒が韓国語で書いた質問を教師が日本語に翻訳し日本語で生徒に質問させ、留学生に日本語で答えてもらい、教師がそれを通訳することが授業の大部分を占める授業計画があった。生徒の日本語体験よりは「韓国語で日本文化を理解する」ことを中心にしたいとのことだった。ここで教師あるいは留学生が韓国語で説明したり話したりする活動をどの程度許容するかが課題となった。

また、生徒が考えた質問の中には、留学生が答えにくいもの、調べないとわからないものも出てきた。教師は生徒の質問リストを授業計画案に記したが、質問の量や内容に対し留学生が負担を感じた部分もあった。

→【対応策】次学期から教師事前講習会で生徒の日本語体験を重視し、習った内容で話す授業を考えるよう促した。そして、留学生にできるだけ韓国語を使わせないように、また、生徒の自由質問の内容にも配慮するようお願いした。

### ③留学生任せ

留学生に授業の進行の大部分を任せてしまい、教師の準備、コントロールに疑問が残ることがあった。留学生からも教師が授業を主導するはずなのに、そうではなく戸惑ったというコメントがあった。

→【対応策】次学期から教師事前講習会で教師がきちんとコントロールするよう指示した。

### ④日本語教育アドバイザーがどこまで踏み込むか

生徒と留学生のやりとりをあまり重視していないと思われる授業計画が散見された。たとえば「留学生は発話モデルをするだけで、生徒とのやりとりが極端に少ない授業計画」「教師の説明が中心で、生徒も留学生もあまり話さない授業計画」などである。第7次教育課程で会話教育に重点が置かれているとはいえ、説明中心の授業をする教師も多い。授業計画案を確認した際、教師の希望を汲み取りつつ、一部授業計画に変更を加えてもらうこともあったが、「このままでは留学生を生かした活動にならないかもしれない」と思っても、あえて言わないようにした。どこまでアドバイスすればいいか、何も言わないことが果たしていいのか、考えさせられた。

→【対応策】次学期から、生徒の日本語体験を意識したアドバイスをこころがけた。生徒が日本語で話す活動が少ない場合、教室活動の提案などもした。

#### 4.4.2 教師のふりかえり、授業の検証の不在

教師が授業計画案を立て、留学生を招いた授業をしてもらったが、2007年前期はそのあとのふりかえりまでは踏み込めず、教師の実践を「計画→実施→検証」という形では残せなかった。教師が体験した「新しいスタイルの授業」が実際はどうだったのか、具体的にソウルセンターと教師、あるいは教師同士で共有する必要があると考えた。

##### →【対応策】

①2007年後期以降、教師に授業報告書提出を依頼した。報告例として「実際の授業はどうだったか」「生徒へのアンケート結果あるいは生徒の様子」「留学生について」などを挙げたが、内容は自由とした。2008年前期からはフォームを作成。報告内容を指定した。これによって「計画→実施→検証」という形で成果物が残せるようになった。授業報告書は参加教師で共有した。

提出人数：2007年後期13名（参加16名）、2008年前期15名（参加16名）、  
2008年後期7名（参加9名）

②2007年後期以降、教師授業情報交換会を実施した。出席者は多くなく、情報交換の必要性を感じない教師もいるようである。しかし、人数が少ない分、一人一人が発表、発言する時間が確保され、有意義な情報交換ができた。

参加人数：2007年後期5名（参加16名）、2008年前期6名（参加16名）  
2008年後期5名（参加9名）

③2008年度、ソウル市教育庁に職務研修として認定されたため、教師事前講習会と教師授業情報交換会を必修にすることができ、「計画→実践→検証」というプロセスが踏みやすくなった。「研修としては大変」という声も聞かれたが、実践とそのふりかえりを通して、中身の濃い研修内容になったと思われる。

職務研修履修者：2008年前期6名（参加16名）、2008年後期5名（参加9名）

#### 4.5 本プログラム実績

本プログラムの実績を表6に示す。各学期派遣50回を考えていたが、想定より参加教師が少なく、2008年前期が最高で41回留学生を派遣した。2008年後期は応募数がかなり減った。

表6. 本プログラム実績

	教師数	学校数	派遣回数	留学生派遣人数	授業時間数	教師平均授業回数	留学生平均活動回数	生徒概数
2007前期	17名	12校	23回	18名	44時間	2.6時間	1.3回	1600名
2007後期	16名	15校	30回	19名	59時間	3.7時間	1.5回	2200名
2008前期	16名	15校	41回	16名	76時間	4.8時間	2.6回	2800名
2008後期	9名	9校	21回	11名	37時間	4.2時間	1.9回	1400名
累計	58名	51名	115回	64名	216時間	3.7時間	1.8回	8000名

参加教師数が想定より少なかった。広報はある程度幅広く行い、2008年度はソウル市教育庁から職務研修として認定されたものの、期待したより反応がなく、結果的に参加教師は増えなかった。参加を躊躇する理由として、教師からのアンケートや教師から直接聞いた話によると、以下のようなことが挙げられる。

- ①外的理由：学校の許可が下りない。同僚との折り合いがつかない。高校3年生担当で授業をしない。(受験準備で日本語の時間が自習時間になる学校が多いため。)
- ②教師の意識：留学生を呼ぶ必要はない。生徒は何も話せない。来てもいいが、留学生が授業をすればいい。
- ③時間や労力：忙しい。事前講習会の参加や授業計画案の事前提出が義務づけられており、負担が大きい。
- ④授業方法：どんな授業をしたらいいかわからない。

①②③が理由になる教師が多いのではないと思われるが、これらに対しては対応が難しい。アプローチする可能性があるとするれば、④が理由になる教師であろう。

派遣を希望した教師にも「留学生が何かしてくれればいいのに」という意識が見え隠れすることがあった。「教師がなにも準備せずとも、留学生が来て何かしてくれる」としたらまた違ったかもしれないが、留学生に法律上の活動制限がある以上、留学生任せの授業はできないし、ゲストとして派遣するしかない。ソウルセンターとしては、制限の中で最善と思われるプログラムを提供してきたつもりだが、韓国人教師の現実に合わなかったことについては一考の余地があろう。

## 5. おわりに

本プログラムは、2008年度をもって休止された。2年間で韓国中等教育機関の生徒約8000名が留学生を導入した授業を体験したが、生徒が留学生を歓迎し、楽しんでくれ、日本語および日本文化にさらに興味をもつようになったことが伝わってきたことが大きな成果であると言える。これは参加教師、留学生に負うところが多く、改めて感謝するところである。

本プログラムの目的は概ね達成できたと考えられる。参加教師から本プログラムでの新たな体験が新しい気づきにつながったという声も複数あり、その気づきが第7次教育課程の目標に近づくための効果的な授業を再検討するきっかけになることが望まれる。さらに、今後も継続して教師が自身の実践を反省、分析し、日常の授業と関連づけていくことが期待される。

参加教師数は当初の予測よりも少なかった。また、継続参加者教師が少なかったのは、効果を理解しているものの、忙しい日常業務の中での負担が大きいことが原因であろう。日本語ネイティブを導入した授業は、ティーム・ティーチングを継続的に行っている高校でも試行錯誤の段階である。留学生を派遣するという試みも時期尚早という感は否めないが、一つのプロトタイプを提供できたのではないかと考える。韓国のみならず、他の国でも同じようなプログラムを実施できないだろうか。

留学生は韓国中等教育機関の日本語の授業に参加し、韓国の中高生と交流できることに大きな魅力を感じたようだ。継続参加者もいたし、知人にプログラムへの参加を呼びかけてくれる者もいた。また、本プログラムへの参加を機に日本語教師を志した留学生もおり、2009年9月現在、3名が日本語教師として教壇に立っていると聞いている。本プログラムに生き生きと、積極的に参加してくれた留学生の様子を思い出すにつけ、今後このような機会が継続して提供されることが望まれる。日本語教育を離れ、青少年交流として留学生が中等教育機関を訪問するようなプログラムを考える余地もあるかもしれない。

〔注〕

- <sup>(1)</sup>本プログラムは国際交流基金日本語国際センターの三原龍志専任講師が国際交流基金ソウル日本文化センター在任中（～2007年3月）に企画、立案したものである。
- <sup>(2)</sup>ここで言う日本語ネイティブは、「日本語を母語とする者」であり、当然のことながら「日本語を母語とする日本国籍保持者」のみを意味するものではない。本稿においては主に「日本語を母語とする日本国籍保持者」と「日本語を母語とする韓国籍保持者」（いわゆる在日韓国人）を念頭においており、本プログラムに参加した留学生もこの両者であった。無論、日本語ネイティブであれば日本国籍あるいは韓国籍以外の留学生にも参加資格があった。
- <sup>(3)</sup>「教育課程」は日本の学習指導要領に当たるものである。2009年現在、第7次教育課程が施行されている。
- <sup>(4)</sup>韓国中等教育日本語教師の自主活動グループ
- <sup>(5)</sup>韓国中等教育機関教師を対象とした教師研修には「資格研修」「職務研修」「自律研修」があり（国際交流基金ホームページ「日本語教育国別情報 2009年度韓国」）、職務研修は研修を主催する機関が、機関が所在する地区の教育庁の認定を受けて実施する研修である。職務研修修了者には、教育庁から15時間につき1学点が与えられる。韓国では中等教育機関の教師が定期的に職務研修を受け、学点を取得することを義務化する動きがある。

[参考文献]

- 長田佳奈子・北村武士・中沢徳子 (2009) 「韓国中等教育機関への日本語ネイティブ留学生派遣プログラムの成果と課題—日本語ネイティブ留学生へのアンケートから—」『日本語教育方法研究会誌 Vol. 16 No. 2』、28-29
- 国際交流基金 (2008) 『海外の日本語教育の現状—日本語教育機関調査・2006年—』
- 澤邊裕子・金姫謙 (2005) 「韓国中等教育段階における日本語母語話者参加の実態とその意義」『国際交流基金日本語教育紀要』第1号、国際交流基金
- 中沢徳子・宋恩敬・李仙雨・李点徳・洪泰淑・北村武士・長田佳奈子 (2008) 「韓国中等教育機関における留学生ボランティアを活用した授業実践」『日本語教育世界大会2008《第7回日本語教育国際研究大会予稿集》第1分冊』、242-245

[参考ホームページ]

- 教育統計サービスホームページ『2008年教育統計年報』  
<<http://cesi.kedi.re.kr/index.jsp>> 2009年9月1日参照
- 国際交流基金ホームページ「日本語教育国別情報 2009年度韓国」  
<<http://www.jpf.go.jp/>> 2009年12月1日参照
- 日本学生支援機構「協定等に基づく日本人学生の海外派遣状況 (平成19年度版)」  
<<http://www.jasso.go.jp>> 2009年9月1日参照

